

入試方式	科 目	学 部	学 科	分野・コース	
面接・小論文方式	小論文	家政学部	児童学科	—	
受験番号		氏 名			採 点

【1】 以下は、全国の小学校第6学年児童を対象にした調査の回答結果（抜粋）です。小学生のICT機器利用の現状について、この回答結果からわかることを200字以内で述べなさい。

◆ 学習の中でコンピュータなどのICT機器を使うのは勉強の役に立つと思いますか。（％）

役に立つ	どちらかといえば役に立つ	どちらかといえば役に立たない	役に立たない
66.1	28.4	3.5	1.7

◆ 普段（月曜日から金曜日）、1日当たりどれくらいの時間、スマートフォンやコンピュータなどのICT機器を、勉強のために使っていますか。（％）

3時間以上	2時間以上 3時間未満	1時間以上 2時間未満	30分以上 1時間未満	30分未満	全く使っていない	ICT機器を持っていない
3.9	4.5	11.8	21.6	29.5	19.9	8.9

◆ 普段（月曜日から金曜日）、1日当たりどれくらいの時間、テレビゲーム（コンピュータゲーム、携帯式のゲーム、携帯電話やスマートフォンを使ったゲームも含みます。）をしますか。（％）

4時間以上	3時間以上 4時間未満	2時間以上 3時間未満	1時間以上 2時間未満	1時間未満	全くしない
15.4	13.4	20.3	26.8	16.6	7.4

入試方式	科 目	学 部	学 科	分野・コース	
面接・小論文方式	小論文	家政学部	児童学科	—	
受験番号		氏 名			採 点

【2】 以下の文章は、ある幼稚園における保育の実践の記録です。保育者として大切にすべき態度や姿勢はどのようなことか、この文章から考えられることを3つ挙げ、600字程度で述べなさい。

6月の末、園庭の土の中から貝殻を見つけ、その貝殻の名前を知るために子どもたちと一緒にばらばらと図鑑のページをめくっていた。A子は「ちょっと待って。」と、他の子どもたちにページをめくる手を止めさせ、ひまわりの種の絵を指さした。

「この種、見たことある。」

S子「どこで？」

A子「あそこで。」

保育者「おうちで？」

A子「ううん、玄関。」

保育者「どこの？」

A子「幼稚園の玄関だよ。こっち、こっち。」

A子は保育者の手を引っ張って、インコの餌箱の前に連れて行った。

A子「これだよ。」

餌箱には、インコの餌としてひまわりの種がたくさん入っていた。保育者は、「ああ、これね。」と、インコの餌を一握り失敬して、傍にいた子どもたちに1粒ずつ与えた。

これを見ていたA子は、「そうだ、いいことがある。これを畑に植えてみたい。」と、みんなをクラスの前のプランターに連れていった。

A子は、「これを持っていて。」とひまわりの種を保育者に預け、砂場から持ってきたシャベルでトントントントンと数回、鍬を振り下ろすという感じで土を返した。

よく見ると、A子のシャベルの振り下ろし方は、まっすぐに振り上げて、土に振り下ろすだけの動作であった。それは、テレビアニメの昔話で観たままの簡単な動作が、子どもには土を耕すということであると受け止められているように思われた。

A子はそれで十分だと思ったらしく、その土がひっくり返ったところにインコの餌箱から持ってきたひまわりの種を全部蒔いて、固まったままの土を上から載せた。保育者は、もっとしっかり土を耕した方が根が張れるのにと思ったが、A子の意向を汲んで黙っていた。

それでも、あまりにもひまわりの種がかわいそうに思えたので、子どもたちの降園後に、柔らかくした土を分からないように少しだけかけておいた。

翌日、A子たちは登園するとすぐにプランターの様子を見て、「お水をあげるよ。」と言って水をかけていた。

7月の初めには、ひまわりの芽が出始めた。

気づくと、夏休み前までには、種を蒔いた子どもたちだけでなく、クラスの子どもたち全員がひまわりに水をやっていた。

1学期終了時には、ひょろひょろとした10センチくらいのひまわりであったが、保育者が2学期の準備で園に来たときには、1メートルくらいに伸びており、小さな花をつけていた。小さな花を見つけた保育者はうれしく思い、子どもたちにもこの花を見せたいと考えた。

もうすぐ始業式という日に、園芸業者が各クラスのプランターにきれいな花を植えていった。業者の方は、クラスのプランターに植えてある子どもたちが育てた弱々しいひまわりを見て「大きなたんぼぼみたいなひまわりだね。」と言っていたが、7本のひまわりはそのまま残してもらうことにした。

しかし、保育者はその言葉が気になると同時に、他のクラスのプランターとの違いを見て、これでよかったのだろうかとも感じていた。

始業式の日、子どもたちは登園するとすぐに咲いているひまわりを見て、花が咲いているねと喜んだ。他のクラスの花との違いは感じていないようだった。

次の日、保育者はたんぼぼの絵を見せながら、園芸業者に言われたことを子どもたちの前で話した。

「せっかく咲いたひまわりだったから、残しておきたかったのよ。」

と言うと、子どもたちはひまわりとたんぼぼの絵を見比べていたが、A子は、

「先生、本当だね。本当に大きなたんぼぼみたいなひまわりさんだね。」

と、周りで聞いていた子どもたちに呼びかけた。

子どもたちは、うんうんと頷きながら、「大きなたんぼぼみたいなひまわりさんに水をあげよう。」と口々に言いながら水をあげたり、倒れないようにひごを立て紐で結んであげたりしていた。

「今日は私が水をあげたから、明日はKちゃんの番だよ。」と、子ども同士で当番を決めて大きなたんぼぼみたいなひまわりを育てていった。

自分たちが蒔いた種が花を咲かせたことに子どもたちは十分な満足感をもち、優しい気持ちで大きなたんぼぼみたいな小さなひまわりに愛情を与えていた。

